

日本語教育実践研究 (14)・(15)・(16)

コーディネーター 宮崎 里司

2006年春学期より新設された日本語教育実践研究(14)(15)(16)は、これまでの実践(1)－(13)とは異なる、新たな実践研究として位置づけられており、日本語教育研究科で受講する実践の総決算として位置づけられています。以下にその目的ならびに内容について概説します。

目的

- ・ 日本語習得を目的とする学習者に、日本語学習の機会を提供することで、インターアクション問題の解決に向けた支援をする
- ・ 日本語クラスを担当する実践能力を高めることを目的とした「実践研究」をめざす
- ・ 当該実践研究の運営を、日本語教育研究科に在籍する修士・博士課程の学生が、主体的に関わることで、意識化を図る機会を提供する
- ・ 日本語教育研究センターの日本語教育の充実と、日本語教育研究科の教員養成に資する

実践研究の受講生(実習生)は、日本語教育研究センター設置の日本語コースの受講生ならびに、早稲田に在籍する留学生により構成された特別クラスでの実習を行うこととなりますが、対象となるレベルは、レベル1(初級)、レベル2(初級)、レベル3(初中級)、レベル4(中級)と多岐にわたっています。そうしたクラスで、初級から中級段階の学習者を対象とした「実習クラス」におけるコースデザインおよび授業運営に関わりながら、クラスマネージメントについても学んでいきます。具体的には、実習生が交替で授業を担当し、他の実習生は授業を見学や、時にはアシスタントして参加する形態で進められます。

一方、実習クラス終了後には、実践研究クラスが設けられ、実習クラスを見学した担当教員やコメンテーターなども参加し、実習生の授業運営に対するコメントや、今後のクラスマネージメントへの助言を行いながら、今後の授業準備や授業活動などについての建設的な検討を行います。

先学期の実習クラスならびに実践研究クラスは、8週間にわたって行われました。本稿では、その実践に関する考察をまとめた論考が、他の実践研究とともに掲載されています。そこでの実践を通じた意義ある論考が、近未来における、実習生の教育実践に生かされることを期待しています。

(ミヤザキ サトシ・日本語教育研究科教授)